

「経済学で言うところの経済人」は存在するのか？

猪野弘明

本稿を執筆するにあたって私のところに寄せられた質問は「経済人は存在するのか」というものであった。「経済人」とは経済学で前提とする人間像であり、自らの利益を最優先し、かつそのために最善の手段をとる人間のことである。本稿では、仕事上の人間関係を考えるうえで有用な「ただ乗り問題」を例にとって、経済人について考えてみよう。

社会に出るとチームで仕事をしてひとつの成果を目指す機会がますます増えていく。もちろん大学の間にも、例えばグループ学習による発表など、様々な形で似たような経験はしてきているであろう。さて、このような経験のときに、自分は他の人よりずっと努力をしたのに、達成された成果は全体のものになってしまい、不満を感じたことはないだろうか。グループ学習でさぼっていた人にも他のメンバーの努力によって達成された発表の高評価が加わり、ずるいと

感じることはよくありそうなことである。

実は、これは経済学で公共財の「ただ乗り」問題として知られる現象である。皆で共有するひとつの成果は公共財である。個人々の努力は（成果が皆のためになるので）その努力以上に全体の合計利得を高めるが、しかし個人的に得られる利得は（成果は皆に分散するため）自分の提供した努力に見合わない、という状況がこの問題の本質である。このようなとき、個人の観点からは努力を惜しむインセンティブ（動機）が発生し、全体の観点との不一致が生じる。全体のことを考えて努力を提供した者から見ると、この個人インセンティブに従って努力を惜しみつつ成果を受け取る者はただ乗りをしているというわけである。

チーム内のメンバーが皆、冒頭で述べたような自らの利益のみを最大化する経済人であると、全員が他人の努力にただ乗りをしようとし

て努力を提供しない。この結果、チーム全体で全く努力が行われないう最悪の事態を招く。これが経済学の教えるところである。ところが現実の世界に目を向けると、多くの人が全体の成果を旨ざして努力した経験があるだろうし、ごく一部ならまだしも、常に全員がただ乗りをしようとして協力的体制が崩壊するとは限らない。人間は経済学が仮定する経済人とは異なっているように見受けられる。

だが、現実には経済理論の結論と異なる現象が多く見られるということだけで、経済人を想定する経済学に意味がないと結論付けてしまうのは早計である。物理理論が、純粋な真空・適切な温度などの環境下で定式化され、その理論的結論があるとき現実に起こったことと一致しなかったからと言って、物理学が意味のないものと解釈することはあまりないであろう。現実はいろいろな要素が絡み合い複雑である。このた

め、物理学などの自然科学では、理論の妥当性を検証するために、実験室で他の条件をできるだけ排した理想的な状態、いわば「純粋な真空状態」を作り出し何度も実験を行う。社会科学である経済学では、自然を相手にする物理学などとは異なり対象は人間であるため、「純粋な真空状態」を作り出すことは容易ではない。しかし、近年発展してきた実験経済学という分野では、他の条件をできるだけ排したゲームを作り、現実とは切り離れた実験室に集められた被験者にプレイしてもらうことで、理論の妥当性を検証しようとする。経済的なインセンティブをなるべく正確につけるために、被験者が受け取れる実際の報酬がそのゲームで挙げた点数に依存して増減する。

実は、公共財のただ乗り問題は、「公共財ゲーム」と呼ばれる経済学における実験がいろいろな形で行われ、その結果がかなり蓄積されている現象である。このゲームの理論値は、ただ乗りのインセンティブによってまったく努力を提供しないように設定されているが、多くの実験の結果では被験者は自身のもてる努力の40〜60%ほどの努力を提供している。しかしこれは最初にゲームをしたときの値であり、繰り返し公共財ゲームを行うとだんだん努力の提供量は減っていき、最後には(多くの実験では10回ゲームが行われている)平均して75%の被験者が全く努力を提供しなくなる。公共財ゲームにおいて人間は、当初はチーム全体のために努力提供をするという現実的な行動をするが、現実から切り離された実験室でゲームを繰り返すうち

に、長期的にはおおよそ経済人的な行動をとるようになる。

このような現実と理論・実験の差はどこから来るのであろうか。これは複雑な現実には存在するが純粋な実験・理論では排されているものによく目を凝らすことで見えてくる。例えば現実の仕事や講義では、グループ全体が挙げた最終的な結果のみではなく、チーム内の個人々の努力具合もある程度観察されており、評価の対象となつているかもしれない。しかし実験では、点数となるのはあくまでチームの成果になるよう制御されている。また、現実には長期的な人間関係も重視されているかもしれない。繰り返し同じチームとなつて仕事や学習をする相手であれば、ただ乗りをすることで信頼を失うことは痛手である。また今回限りの相手であったとしても、そこから今後の人間関係が発展するかもしれない。一方、上記の実験結果は、ゲームごとに匿名性を保ちつつランダムにチーム分けされる場合のものであり、今後の人間関係は排されている。

また、理論と実験の結果に差が生じることもある。たとえば、公共財ゲームの後に他の被験者に罰則を与えることができるオプシオンをつけると、実験における協力体制は飛躍的に向上し、最後のゲームでも自身のもてる努力の75%ほどの努力を提供する。これはもちろん、ただ乗りに対して人々が罰則を与えるからである。しかし理論的には、罰則はゲームの成果が成就した後のオプシオンであるため、結果を何も変えないはずである。それどころか、この実験で

は、人に罰則を与えるには自分自身もそのためのコストを負わなければならないよう設定されている。経済人ならばこのような得にもならない仕返しに労力を割かないはずである。しかし、人間がもし自らのことを考える経済人ではなく、チーム内の公平性を重んじる心を元来備えているのだとしたら、実験をいくら「純粋な真空状態」に設計しても、被験者が人間である限りは不公平に憤つて罰則を与えることはあるだろう。

ここまでに挙げた議論を見るだけでも、「全体の最終的結果のみでなく個々を見ること」「長期的な人間関係」そして「公平性を重んじる心」などの協力における重要性といった、いかにも人間臭い事項が浮かび上がってきた。いずれの事項も、経済人と現実・実験における人間を比較検討することによって、かなり理論的に浮かび上がってきたことは驚きではないだろうか。経済学における経済人は架空のもので、状況が複雑になるほど事態を予測するには不足になるかもしれない。しかし現実との差がある時こそが醍醐味である。経済人を基準、いわば「ものさし」として、差によく目を凝らせば、数々の重要なことが意識的に整理され見えてくる。そして、状況が複雑になるほど、できるだけ単純だが確固たる「ものさし」をもって状況を眺められることは、有効な力となるのである。

参考文献・実験結果は、「Theories of Fairness and Reciprocity - Evidence and Economic Applications」Fehr & Schmidt (2001) の記述に依った。